No.77 2007年 7月号
宝塚造形芸術大学

ArtHill NEWSL

「美術史・美術理論、彫刻、日本画」3コース特集号
～わたしたちの授業はこんなふうに～

名作の心と技法を追体験 全国でも珍しい美術史・美術理論コース

描く対象の内面に踏み込む 日展の入選者も育つ日本画コース

1年次から木彫・石彫に取り組む パソコンも駆使する彫刻コース

さきの洋画コース特集に続いて、本号は「美術史・美術理論」、「日本画」、「彫刻」3コースの特集号です。

美術史・美術理論コースは世界の名作の心と理論を学び、模写や模刻を通じて名作の制作技法を追体験します。修復技術や英語力も磨く全国でも珍しいコースです。

日本画コースは1、2年次は写生が中心ですが、対象の内面的な気持ちにまで踏み込んで描きます。3、4年次は教員の懇切な個別指導を受けながら存分に個性を発揮し公募展などへ積極的に挑戦します。日展の入選者を毎年のように出しています。

彫刻コースの特色は1年次から木彫、石彫を学ぶことです。多くの芸大では粘土で形を作るモデリングから始めますが、先に立体のイメージをつかんだ方が上達は早いという指導方針で、公募展でも数多くの入選者を出しています。

背中に目を付ける!!

新入生が、入学後最初の石彫演習で耳にする言葉です。作業する対象だけでは無く、背後の気配にも注意しながら制作に集中する。それは自らの安全と仲間への思いやりから始まりますが、４年を経過する中で五感を研ぎ澄ます緊張感の持続に耐えられる精神のタフネスが醸成されます。
彫刻コース卒業後、どの様な職種・職場に携わっても役立つ人材と評価されているのは、この部分からだと確信しています。

彫刻コースの現況

市川　悦也

彫刻コースは、創学以来設置されていて、本学発展の基となっているコースのひとつです。多数の彫刻家の雛を輩出していますが、作家として羽ばたくには、もう暫く時間が必要です。一方美術畑の職業に就いた多数の卒業生もそれぞれの職場で信頼される人材として大切に扱われている様です。両者共にあと10年、制作に職場に余裕が持てた頃には、彫刻コースのファクトリーは完成するのだと確信しています。

彫刻コースでは、本学ホームページ上で造形展出品者の作品と私の寸評を掲載していますから是非訪問してください。
http://www.takara-univ.ac.jp/c/scu/
彫刻コースの楽しさが理解されると思います。

この学生のここを評価する

彫刻コースでは、一人一人の学生に４人の教員が総がかりで指導しています。ですから各教員毎の学生ピックアップでは無く、学外でも評価を受けている作品を取り上げる事にしました。三人の１回生当時、最初の作品です。

「GORON」坪田 和紗

坪田　和紗　2回生　「GORON」
ＪＲ川西池田駅前ロータリー入り口・（株）計測器センター前庭に設置された石彫作品。
入学後、初めて制作した彫刻作品が、モニュメントとして活かされました。

加世田　悠佑　2回生　「むにゅ」
福山　真梨子　2回生　「両親の愛に包まれて」
阪急宝塚線山本駅近くのカフェレストラン Le croissant に設置展示された石彫作品。
初めて取り組んだ石彫制作が評価されて展示されています。

3人とも、木彫課題でも頑張りました。2回生以降も今のペースで続けてください。

全　景

「むにゅ」加世田悠佑

「両親の愛に包まれて」福山真梨子

トピック

彫刻コース

「霧島高原設置作品」

鹿児島県霧島高原に彫刻コース学生が制作した石彫作品が設置されました。
広大に拡がる霧島高原一帯に展開する「アート牧場計画」。「霧島芸術工房」が鹿児島県湧水町と共同企画して推進する町おこしですが、アートディレクターとして、本学彫刻コース卒業生久保健史さんが起用された事から、彫刻コースとして協する事になりました。
コース課題として1回生当時に制作したまま放置されていた石彫作品40数点と卒業制作作品5点が昨秋4ｔトラック2台で運ばれ、一気に彫刻村の雰囲気を作り上げました。産学協賛企画事業として今後も引き続き協力を継続する事になっています。http://kirishimaart.co.jp　霧島芸術工房にアクセスすると計画の全貌が見えてきます。

日本画コース

「夏のおわり」梶原美紀

「日曜日」田原麻衣

本学では美術学科の学生は一割程度しかいません。しかし芸術系の大学で美術学科はその根幹をなす学科であると自負しております。その中で、我が日本画コースは全学年で30名にも満たない小さな小さなコースです。少人数であるが故に、我々教官も各自の能力や個性をしっかりと把握してきめ細かい指導をしております。日本画について何も知らなかった学生がその面白さや楽しさに目覚めると急激に上達して次々に結果を出しています。昨年は日展と日春展（日展日本画部春季展）にそれぞれ二人が入選しました。今年の日春展にも二人が入選しました。秋の日展やその他の公募展やコンクール展に向けて積極的に挑戦して行きます。写真は日展入選作品です。若い感性の溢れた爽やかな作品です。

美術史・美術理論コース

今春卒業した美術史・美術理論コースの第1期生5名は、各自卒業制作を仕上げ、卒業論文を公聴会で発表して、実社会に羽ばたいていきました。

卒業論文のテーマ：
○井上幸恵「レオナルド・ダ・ヴィンチ『最後の晩餐』について」
　　～作品模写制作過程を通しての考察～
○岡崎祐子「崇高なる『癒し』の空間ーMARK ROTHKOの世界」
○椎木拓哉「『無題』・野邑正吉油彩画修復研究ー理論と実践ー」
○福井彩恵「パウル・クレー～探求の画家、その人生～」
○四元晴美「寶塔寺金欄巻の研究」

卒業論文を発表する公聴会風景

卒業制作賞を受賞した四元晴美さんの卒業論文

四元さんの作品：『寶塔寺本堂柱金欄巻復原図模写』

私はこういう教員、こんな授業をしています　彫刻コース

「押し広げ引き裂かれたCAOS」

■市川　悦也
1940年・奈良生まれ。
主に「新制作展」会員として活動しています。
授業では、「井の中の蛙」に満足しがちな当世学生に、常にインターナショナルな視点からの刺激を与え続け、その土壌としての日本文化の諸々を示し、彫刻表現の技術研鑽を今日的な視点から指導しています。

「天の探女」

■西村　公泉
1950年・大阪生まれ。
主に「国画会」会員として活動しています。
授業では、作品の作り方・技術教育のみを強調するのでは無く、学生個々人の独自の感性を引き出し、それに気付かせ自信を持たせる事を目的としています。

■冨長　敦也
1961年・大阪生まれ。
1997年ポーラ美術振興財団より在外研修助成金を受けイタリアに留学。個展を中心に作品発表を展開しています。
授業では、グローバルな視点から世界にも通用する作品制作を学生と共に探求する姿勢で取り組んでいます。

「腰をかける人」

■合田　望
1977年・京都生まれ。
宝塚造形芸術大学大学院で彫刻を専攻修了しました。2006年「国画会展」で会員推挙を受け、2007年4月から助教として後輩の指導をする事になりました。
授業では、学生時代に教わった基礎知識が、展覧会や作品発表の場だけでは無く、どの職業に於いても即戦的に役立つ事ばかり、大切な要点を教わっているのだと身を以って経験してきた事実を伝達し、後輩たちと取り組んでいきたいと考えています。

「地を這う者達」

今、業界は

私達は、作家を育てています。その前に優れた職工を育成しています。職工に徹するほどの性根を持っている者であれば、作家にもなれますし、どの様な業種・企業でも就職可能と考えています。だから「作家」を目指してほしいのです。日本の芸術家の海外での活動機会は、年々増加しています。彫刻家もその例外では無く、各国で開催される国際展やアートフェアが活動の場となり、それに伴ない海外での個展開催も特別なものでは無くなりました。国内でも大胆な空間に占められたモダンな住宅が普及し、これまでは余り見られなかった彫刻のある家も多くなりました。この様に今日では彫刻もまた、多種多様の作品発表・作品紹介が可能になり、生活スタイルの変化による社会の需要も拡大しつつあります。

平成19年7月10日発行
■発行所　宝塚造形芸術大学　〒665-0803 宝塚市花屋敷つつじガ丘７番27号　PHONE 072-756-1231
■発行人　橋爪竹一郎　■編集　橋爪竹一郎　尾崎 勇　[URL] http://www.takara-univ.ac.jp
フリーダイヤル 0120-561-257
[E-mail] info@takara-univ.ac.jp

次代の美術界を担うエキスパートの育成を目指す
「美術史・美術理論コース」

コース主任　関　隆志

「ダ・ヴィンチについて知りたい。そして、絵も描きたい。」美術史・美術理論コースは、そんな人のためのコースです。実際、ダ・ヴィンチについて論文を書き、卒業制作として『最後の晩餐』の壁画手法の再現を試みた学生がいます。

今年５年目を迎えた美術史・美術理論コースは、美術の表現力を伸ばし、同時に美術史上の名作の理解力を高めることができる、フレッシュでユニークな、日本唯一のコースです。現在、大学院生から学部の１年生まで、コース内の勉強会を通して互いにコミュニケーションを取りながら、クールに学んでいます。

作品制作技術と美術理論を学ぶ美術史・美術理論コースは、実社会で求められる英語やプレゼンテーションの力をつける実務的な教育プランも用意しています。

大阪市立大学名誉教授、ルール大学（ドイツ）大学院歴史学研究科博士課程修了（Dr.d.Phil.）、著書に『古代アッティカ杯の研究（独文）』（マン出版社・ドイツ）、『古典古代芸術家事典（独文）』（ザウアー出版社・ドイツ：共著）、『パルテノンとギリシア陶器』（東信堂）など多数。ギリシア文科省主催の「国際パルテノン修復会議」（アテネ）、ハーバード大学主催の「第16回国際古典考古学会議」（ボストン）、北京大学主催の「国際歴史学会議」（北京）等に招待されて報告するなど、海外を中心に活躍する美術考古学者。最近は、科研費による研究や、NHKハイビジョン特集「パルテノン神殿―美と叡智の宝庫」への出演、朝日新聞学芸欄への寄稿、『週刊新潮』からのインタビュー、さらにはルーブル展での特別講演などを精力的にこなす。アテネ考古学協会名誉会員・国立ドイツ考古学研究所海外会員。

2006年度春の造形展に集まった学生と教員スタッフ

■それでは、美術史・美術理論コースで学ぶ【実技】と【理論】の実際を紹介しましょう。

実技篇　1年生の課題と目標は、絵画と彫刻に見られる種々の表現技法に親しむことです。そして、模写・模刻を通して名作に出会うことになります。

［模写（日本画）］

■ 山田　毅先生の作品：『網人』（あみゅうど）

四月のオホーツク。大きな網を立て、海明けの準備に追われる漁師の姿がありました。いずれの漁師も、網に詩りを持ち、船の上では期待と不安の中、命を懸けて網を引いています。自分もそんな気持ちで制作できれば…と思っています。

■ 山田先生の授業：［模写（日本画）］の授業の課題と目的

日本画の琳派の時代の作品を模写することにより、当時の技術や物の考え方を感じ取り日本の伝統を後世につないでいく役割を果たす一員となれるよう、技術を磨くのが課題と目的です。

■ 山田先生の推薦作品：峯森　悠さん（現在3年生）の作品

渡辺始興（1683～1755）作『富士山図』模写：

模写という作業は地道な作業で膨大な時間と忍耐力が必要です。約一年間という時間を、集中力を切らす事なく、コツコツと制作する態度はとても美しく、仕上がった時の達成感に満ちた表情は忘れることはできません。彼女もきっとこの富士山図の事を忘れる事はないだろうと思います。

［模写（洋　画）］

■ 村田　大輔先生の作品：『「Elle」と「Marie Claire」の習作』

制作ではゴム印画法という方法を用いますが、これは写真が発明された当初の技法で顔料をアラビアゴム糊と感光剤によって定着させ、現像の工程で画調を加減したり絵画的な要素を組み入れることができます。又、絵画材料が中心となっている為、長期の保存が可能です。

■ 村田先生の授業：［模写（洋画）］の授業の課題と目的

美術史・美術理論コースの主な修得目標の一つに作品の修復技術があります。修復には、作品の正しい理解が求められます。そのため基礎能力開発が、この授業の課題であり目的です。ここでは、洋画作品の支持体（キャンバス、パネルなど）を自ら作ることから始めて、各時代に即した画法（テンペラ、フレスコ、油彩など）と様々な画材（ペン、木炭、油彩など）を実体験してゆきます。

◎ 下園真蓉さん（現在3年生）の授業の感想

この授業は、洋画の模写を通して作品の時代背景や描き方を学ぶ実習の授業です。しかし、いきなり鉛筆や筆を持ち、描き始める…という訳ではありません。まず手にするのは「鋸」（のこぎり）と「鉋」（かんな）です。木を切り、枠組みをするところから模写は始まるのです。一から自分たちで作り、制作段階の変化を学んでいくのもこの授業の目的です。作品の進み具合は個人差がありますが、村田先生が一人一人にアドバイスをしてくださるので、とても良い授業環境だと思います。私は、絵を「描き上げる」のではなく「つくりあげる」こと。それが模写なのだと感じました。

［模　刻］

■ 西村　公泉先生の作品：『天の探女』

天邪鬼（あまのじゃく）の由来となった「天の探女」は古事記に登場します。「地」の上位が「天界」の最下位ならば、天邪鬼も天界の迷子ではと思い、そんな様を表現した作品です。

■ 西村先生の授業：［模刻］の課題と目的

過去の名作をただ眺めて、知識として覚えるだけでなく、実際に彫刻家はどのようにして彫ったのかということを知って欲しいのです。

2年生の課題と目的は、模写を通して学んだ表現方法をもとに、洋画と日本画の修復の基礎を学ぶことです。

［修復技術（洋画）Ⅰ］

■ 伊東　幸寿先生の修復作品：8F油彩『バラ』萬谷国四郎作

修復前

修復後

『バラ』は昭和初期の作品で美術（国定）教科書に掲載されたものです。およそ80年経過しており、キャンバス地はガーゼ状で隙間があり、絵の具の剥楽も多数あったため、オランダ法による裏打ちを含む修復作業（全工程）を行いました。

■ 伊東先生の授業：［修復技術（洋画）Ⅰ］の課題と目的

人間と同じく絵画も40～50年経過すると劣化が始まり、絵具が剥落します。名画と呼ばれる作品は、必ず修復作業が行われています。医者と同じくカルテを用意します。画材、技法、構造を知った上で、オリジナリティを残しながら処置し、修復記録を付して後世に伝えます。私の授業では、絵画に使用される材料や修復手順を講義し、一部演習を行います。

［修復技術（日本画）Ⅰ］

■ 西　敏彦先生の作品：『かえりみち』日展特選

家の近くの良く使う駅の夕方の風景です。慌ただしく家路に着く人や車など一日の中で最も印象的な刻を絵にしました。

■ 西先生の授業：［修復技術（日本画）Ⅰ］の課題と目的

日本画の修復には、社寺仏閣の彩色模絵、杉戸絵など様々な形態のものがあります。それらを修復するには、絵具、墨、ニカワなどを使い基礎的な技術と知識を習得する必要があります。さらに、表現方法などを学んでいきます。

■ 修復現場見学（宝塚市の中山寺）

3年生になると、洋画修復と日本画修復技術の一層のレベルアップが目指され、同時に、卒業論文を書くための準備が始まります。そして、4年生で卒業制作に取り組みます。

■美術史・美術理論コースのユニークさは、これまでに見た技術の修得に加えて美術に関する理論を同時に学ぶことにあります。次に、美術史・美術理論コースの講義と演習を紹介します。

理論篇　1年生になって最初に受ける講義の一つに西洋美術のルーツについて学ぶ「西洋美術の源流Ⅰ・Ⅱ」があります。

■ 関　隆志先生の授業：［西洋美術の源流Ⅰ・Ⅱ］の課題と目的

大学で受ける最初の講義として、教科書を使用しながら西洋美術のルーツであり、ロマンあふれるギリシア美術の世界を分かりやすく解説します。また、高等学校と異なり大学特有の「ノートの取り方」に配慮して講義を行います。

2年生になると日本・東洋・西洋の三地域の美術史と美学の講義を受けます。同時に美術館に出向いてオリジナル作品に親しみます。

■ 木村　展子先生

専攻：日本美術史、日本建築史。著書：『加西市史・文化財編　建造物』（共著）、「堂内荘厳としての蟠龍図」「仏教芸術」268号など。兵庫県文化財保護指導委員や加西市史編纂委員として活躍、最近は神戸大学の山西省文化遺産調査隊に参加し、雲岡石窟などを調査。

■ 木村先生の授業：［日本美術史Ⅰ・Ⅱ］の課題と目的

講義では学生が創作活動をする際の引き出しのひとつとなるような授業を心がけています。「日本美術史」では原始美術から江戸時代の琳派まで多様な美術作品を紹介しています。

■ 出川　哲朗先生

専攻：東洋美術史（中国美術史）。著書：『中国の美術』（共著）昭和堂、'L'art de Terre'.Lettre de la SFECO, 2003、「官窯タイプ鈞窯磁器の制作年代について」「鹿島美術研究」など。第１回韓国国際美術史学会（ソウル）で、'Craftsman and Artist in the Ceramics of Modern Japan' を発表。

■ 出川先生の授業：［東洋美術史Ⅰ・Ⅱ］の課題と目的

中国の絵画や彫刻、そして玉器、青銅器、陶磁器を含む工芸品の造形を学んで、東洋美術のイメージをしっかり持つことを目指しています。

■ 下濱　晶子先生

専攻：西洋美術史（近世・近代美術史）。著書：『ロートレック』日本経済新聞社、『西洋絵画作品名辞典』（共著）三省堂、『18世紀におけるフランス工芸の発展』日本18世紀学会年報第17号など。第17回国際経験美学会（宝塚造形芸術大学）で英語により発表。

■ 下濱先生の授業：［西洋美術史Ⅰ・Ⅱ］の課題と目的

古代から現代までの西洋美術の流れを概説します。講義が講師から学生への一方向に終わらないように、なるべく制作の一助になるように努めています。またスライドやビデオ、そしてコンピュータを使って少しでも作品を身近に感じられるようにしています。

■ 岩　琢磨先生

専攻：インド思想（哲学・宗教）。　論文：「ナラ物語のジャイナ教伝本の発展Ⅱ」「東海仏教」第四十二輯、「ジャイナ教説話について」「古代文化」第58巻など。

■ 岩先生の授業：［美学Ⅰ・Ⅱ］の課題と目的

「美学」は「哲学」としての要素が強い学問です。従って、「教わる」ものではありませんし、かといって、「学ぶ」ものでもありません。「考える」ものです。そこで、翻訳を通してではありますが、代表的な思想家、芸術家の生の文章に触れながら、ともに考えていくことを目指します。

■ 村田　大輔先生

「日仏現代作家展」審査員特別賞受賞。第79回向日会に作品「1枚の手紙」を出品（東京都美術館）。

■ 村田先生の授業：［美術史実地指導］の課題と目的

美術の活動は作品制作だけではありません。作品を保存して展示し、必要な場合には修復もしなければなりません。そうした活動のうちで、主に展覧会に関することを、美術館に行って展示方法や展覧会の構成を観察して、その感想を発表してもらいます。

◎ 李　鈴子さん（現在4年生）の授業の感想

美術史実地指導の授業では、実際に美術館見学に出かけて、展覧会がどのような手順を経て開催されているかを学び、また、展示作品を前にして絵画の技法などの解説を受けました。そして、各自が興味ある作品を研究して発表する機会もあり、とても意義のある授業でした。

3年生になると、修復技術のレベルアップを目指しながら、先に学んだ三地域の美術史を改めて主体的に学ぶ演習が課せられます。

■ 関先生の授業：［芸術学演習］の課題と目的

［原書講読］の方法を取り、時事英語に親しむ意味で*TIME*の文芸欄を読んだり、ジャンソンの2004年版*HISTORY OF ART*を通して西洋美術を学びます。希望者があれば、ドイツ語、フランス語の講読も可能です。

4年生では、演習の段階からさらに進んで卒論の資料収集法が指導され、後期に卒論を仕上げることになります。

卒業後の進路

美術史・美術理論コース卒業後の進路は、大別して三つのコースがあります。

①修復専門家への道、②美術館・博物館の学芸員や中学・高等学校の先生など、高度の専門性を求められる道と、③一般企業へ就職する道です。修復は文化財保存という社会的責任が伴うため、選抜された学生に修復現場を経験する機会が与えられます。学芸員や先生になるためには、本学の大学院をはじめ、国内外の大学院へ進学して、それぞれの領域のリーダーを目指すことも可能です。

一般企業へ就職を希望する学生は、3年次に提供される英語を中心にした原書講読の機会を通して、実社会に通用する語学力をつけ、さらに、課外勉強会のコロキウムで発表し、プレゼンテーションのスキルアップを目指すことになります。

卒業生の中には、卒業と同時に修復現場に専門家として派遣されている人や、宝塚キャンパスの大学院へ進んで先生を目指す人や、大阪梅田キャンパスの専門職大学院でMBAを取得して、起業を目指す人がいます。

日本画コースの現況

絵画コースから日本画コースとして新たな出発をして四年が経ち、今春第一期生が卒業しました。コースとしてはやっとスタートしたばかりです。このコースが成長、発展していくのはこれからです。伝統校にありがちな型にはまったうまい絵より若者らしい元気で新しい感覚の作品づくりを目指します。2006年、日展に二人が入選しました。また全関西展や西宮市展、川西市展、伊丹市展等で多数の入賞、入選者がでました。

私はこういう教員、こんな授業をしています

曲子 明良

日本画の描き方、表現方法や表現技法はすぐには習得できません。ある程度理解するだけでも四年間ではとても足りません。ただし、感覚とか感性というものは若さということが大きな武器であり、技術的に未熟なものでも生き生きとした感性の光った作品は、技術だけの死んだような作品を凌駕します。美術、芸術は自分を表現することである。とは言ってもそれを表現する術がなければなりません。技術と感性は車の両輪の様なものであり、そのどちらが欠けても前には進みません。

■ 私の作品

「冬隣」日春展（2006）

晩秋の頃、朝露の中で弱い陽の光に包まれてポツンと野に立つ一本の樹。

「ふゆどなり」という語感が気に入って絵のイメージが膨らんできた。

熊谷　有加（3回生）
「微笑の記憶」
春の造形展（2007）

【評　価】

しゃがんだ少女が落葉を手に取ってこちらを振り向いている。画題から察すると幼い頃の自画像であろうか。色彩のバランスも良く、滲みとたらし込みの技法を上手く使い、若い女性らしい柔らかい表現が感覚の良さを感じさせる。

【今後の課題】

デッサンの甘さが気になるがそれがかえって不思議な世界を醸し出している。ただし、いつまでも感覚だけで描けるものではないのでもっとしっかり写生をしてほしい。

塩野　麻衣子（大学院2回生）
「みんなでかえろう」日春展（2006）

【評　価】

雨の日の学校からの帰り道、子供達の話し声や足音が聞こえてくるようだ。動きのある構図と雨の匂いがするほのぼのとした色感が良い。一台の車が更に動きを加速している。

【今後の課題】

この作品に限れば良さとして出ているが、形の甘さや仕事不足が気になるのでもっとしっかり写生に励んでほしい。

牧野　菜生（4回生）
「金魚、彩色（いろいろ）」
卒業制作展（2007）

【評　価】

正方形の画面に上から見た金魚を描いている。構図を決めるのに金魚の型紙を何十枚も作り、いろいろ並び替えて流れやリズムを決めていた。そんな努力が絵に正直に出ている。伝統的な日本画の表現にデザイン感覚を織り込んだ秀作である。

【今後の課題】

もっと時間をかけて描いたり消したりを繰り返して作品に食らいついていけば更に良くなる。学生の作品としては完成度も高くまだまだ可能性を感じさせる。

前田　南奈（2回生）
「すべり台」
春の造形展
（2007）

【評　価】

滑り台を赤い色で象徴的に描いている。公園の背後の実景を消し去り、滑り台を一つの生命体のように表現している。この独特の表現は彼女の持ち味である。この空間表現に日本画の本質を見せる。

【今後の課題】

ねじれた部分の形が少し変だが、そんな事が気にならないくらい強い存在感が画面に表現されている。この独特の絵作りの感覚を大切に育んでほしい。

合評会　　註、学年は制作発表の時点を記載

私はこういう教員、こんな授業をしています

山田　毅

私が日本画に出会い、岩絵具を使い、絵を描き始めて20年が経ちました。もう20年と言うべきか？まだ20年と言うべきか？

とにかく20年間、何かを表現したいという想いで、生活していた事は事実です。現在は学生達と触れ合いながら、お互いに刺激し合える関係でいられればと思っています。授業では日本画の基本である写生を通して、新しい感覚の作品を目指していきたいと思います。

■ 私の作品

「冬」日展（2006）

冬の根室、昔の豊漁を連想させる廃船が雪の中から顔を出していました。自然の厳しさと廃船の造形的なおもしろさにひかれて制作しました。

橋田　真季（１回生）「するめ」
課題 精密模写

【評　価】

対象物をしっかりと観察し素直に写し取るという基本的な姿勢がうかがえる作品である。時間をかけ細部まで丁寧に描かれている。

【今後の課題】

更に観察する目を養い、海の香りまで写し取る様な気持ちで描けば一段深みのある作品になる。

阪田　智世（２回生）「街」
伊丹市展（2006）

【評　価】

誰もが見過ごしてしまいそうな、路地の風景を巧みな構成で切り取ることによって、以前この通りを歩いた事があるかもしれないと、見る者を絵の中に引き込む力を持っている作品である。

【今後の課題】

建築物のデッサンの甘さを反省し、目には見えない街の空気や生活感の表現にまで挑戦してもらいたい。

石川　真澄（３回生）「混合」
秋の造形展（2006）

【評　価】

作者と同じくらいの年令の男女が、微妙な距離を保ち歩いている。場所の説明を省き絵具をたらし込むことによって、若い二人の不安な気持ちや今後の夢といった心情が表現されている。

【今後の課題】

人物の表現方法がイラスト的になってしまう事である。デッサンを重ねてから作品に向かうともっと活き活きした絵になると思う。

今、業界は

日本画を取り巻く状況について考えると、日本画を目指す学生の比率というのはそう急激な増減はないと考えられます。定年で退職したり子育てから解放された大人の世代が人生の再出発として、あるいは趣味として日本画を習い始めるという人は増えていると考えられます。ただ長引く不況による美術市場の落ち込みが回復せず、既存の画家やこれから画家を目指す若者達には厳しい時代であると思われます。